

【特集 デリダ・精神分析・記憶】

『メモワール』の記憶と約束

宮崎裕助

ようやく昨年末に念願であったジャック・デリダの『メモワール』翻訳を刊行することができた。共訳者のお一人吉松覚さんに最初に声をかけて企画を始動したのは2013年の秋であったから、10年近く経過したことになる。『メモワール』は、デリダが盟友ポール・ド・マンの死にさいしてド・マンの記憶に捧げた講演にもとづいているが、私にとってそれ自体思い出深い書物である。『メモワール』にまつわる個人的な記憶を書き留めることで、本書の余白に小文を捧げることにしたい。

『メモワール』を最初に読もうとしたのは、1999年大学院の修士課程に入ったばかりのときであった。新たに指導教員になった高橋哲哉先生にデリダの読み方の手ほどきをしてもらおうと、一緒に読んでもらえないかとお願いしたのである。自分が事前に翻訳をしてそれをみてもらうというかたちで進め始めたが、高橋先生から別の翻訳仕事を任されることになり、『メモワール』の翻訳は早々に中断することになったことを思い出す（別の翻訳仕事というのは『法の力』をめぐる英語論集で、サミュエル・ウェーバーやドゥルシラ・コーネルの論文を翻訳した。残念ながら著作権等の事情でそれらの翻訳は陽の目をみることはなかった）。

『メモワール』を当時すでに修士論文で扱おうと思っていた。なぜデリダのポール・ド・マン論を読もうとしたのか。デリダ研究をしようと駒場の大学院の門戸を叩いたが、同時にポール・ド・マンのことも気になっていた。学部生のころ雑誌『批評空間』や柄谷行人の読者であった私はド・マンの名前を知っていた。とくに同誌では、1996年に刊行されたド・マンの遺稿集『美学イデオロギー』の連載が、翌年上野成利さんによる翻訳で始まっていたからである。

東北大学の学部生だった私は、大学院入試の勉強もかねてと思い、ド・マンの英語のテキストを当時の友人たちとの勉強会で翻訳し、サークルの同人誌に掲載したこともあった（これは「メタファーの認識論」の初出からの邦訳である）。デリダについてはフランス語の手ほどきをうけた梅木達郎先生からその面白さを教えてもらい、大学院のゼミでデリダの講読に参加してもいた。哲学科の卒論では、野家啓一先生の指導のもとで「ウィトゲンシュタインとデリダ」で書き、言語哲学の勉強も一通りやった。しかし『批評空間』に連載されていた『美学イデオロギー』の一連の美学論考は、当時の私ではまだ歯が立たなかった。

まったく根拠はなかったのだが、私は、ド・マンのテキストになにか非常に重要なことが言われているという気配を感じ取っていた。現在から振り返って、『メモワール』の言葉でいえば、そこには「呼びかけ」があり、私は「約束」をしていたことになる。しかし当時の自分には、ド・マンがどういう論者なのか、そもそも何をしようとしているのか、ほとんどイメージがつかめないままであった。そのド・マンについて脱構築の中心人物たるデリダが一冊の本を捧げているのだから、これを読めばド・マンとはどういう存在か理解できるのではないかと考え、大学院に進学したら『メモワール』を真っ先に熟読しようと興味津々だったのである。

そもそも90年代後半当時、ポール・ド・マンといえば、『理論への抵抗』という比較的軽めの単著が翻訳されていただけで（率直に言って翻訳の質はあまり良くない）、主著の『盲目と洞察』も『読むことのアレゴリー』も訳されていなかった。そのためド・マンを読むにはその難解な英語の原文を

直接読まなければならなかった。修士課程の学生であった自分は、日本語で紹介の進んでいなかったまさにその状況によって、ド・マンは腰を据えて本気で研究すべき対象だと思えるようになっていった。

当時東京大学駒場キャンパスでは大学院生同士での自主的な勉強会が積極的に行なわれていた。英語で書かれているド・マンのテキストは難解ではあれ、参加者で共有するさいに第二外国語の壁を気にしなくてよいという点で都合がよかった。同期の竹峰義和君とド・マンの翻訳勉強会を始め、石岡良治君とは二人でファストフード店やファミリーレストランを梯子しながら、あちこちで『読むことのアレゴリー』の読書会をしていたのは懐かしい思い出である。

他方で、私はデリダの読者でもあったため、当時からデリダとド・マンの関係を不思議に感じていた。二人とも脱構築の旗印のもと盟友関係にあり、ド・マンはイェール学派の領袖として脱構築批評の中心人物として知られていた。しかし二人の文体はまったく異なっている。デリダは一般に非常に饒舌であり、テキストを読む以上に書くという印象がある。つまりあるテキストを一見謙虚に註釈していても、テキストの可能性を拡張するようにさまざまな方向にエクリチュールを拡散させていく。

ド・マンのスタイルは、反対に、切り詰める文体である。その読み方はけっして饒舌ではなくむしろ説明不足にすら感じるが、つねに必要な最小限の線をたどりながら、読解の要点を決定不可能性へと追い込んでいき、ある一点で解釈の総体性を一挙に瓦解させるような瞬間がある。デリダのエクリチュールのような華やかさや複雑さはないが、ド・マンには息をつかせぬようなスリリングな凄みがある。要するにデリダとド・マンでは、正反対のスタイルなのである。脱構築の名のもと、いったい何が二人を結びつけているのだろうか。

日本でのデリダの読み手は、当然のことだが、フランス語やフランス文化の専門家によって担われてきたため、ド・マンの存在は知ってはいても、脱構築は結局はデリダに帰すべきものだという認識から出ることがなかったように思われる。実際、英語圏のディコンストラクションは、流行現象としてみるかぎりデリダの亜流であり、貧しいミメシスにすぎないとみなすこともあながち間違いではないだろう。日本ではそうした見方が支配的であったためか、英語で書いているド・マンはヨーロッパの思想や文学の専門家にほとんど相手にされなかった一方で、英文学の専門家からすれば、ド・マンのテキストはあまりに理論的、哲学的にみえ、かつ多言語の文脈を担っているため、接近しにくかったにちがいない。

しかし私の場合、たいした前提知識なしにド・マンのテキストをとにかく虚心坦懐に精読したことがよかったのだろう、ド・マンの思考のうちに、脱構築の形骸化したようなものを認めることはなかった。それどころか、デリダと対抗する脱構築のもうひとつの自律した姿、いわば「デリダなき脱構築」の新たなモデルのような何かを呈示しているようにみえたのだ。脱構築は、デリダという天才の専売特許ではなく、その本性上——あるいはデリダ自身の言葉でいえば「根源的代補」の働きによって——それがそうではない他なるものへと適用されてみずから変容していくことを要請している。ド・マンのテキストを読むにつれ、私は、ド・マンの脱構築が自己自体を脱構築した新たなあり方を体現していると確信するようになった。

このことは、デリダを読むことに解放感をもたらした。デリダのエクリチュールの磁場はしばしばあまりに強力であり、熱心に読めば読むほど、デリダのようにならなくなったり考えられなくなったりするということが生じる。もちろんそのようなことは不可能だが、にもかかわらず、デリダのようになすべきであるかのように思えてくるため、虚しい同一化と彼我の距たりにおのずとさいなまれることになる（とはいえこれは、デリダに限らずある種の思想家や哲学者にのめり込めば往々にして生じることである）。

デリダは脱構築の運動を自身のエクリチュールの才能にゆだねることで、脱構築を応用することにたいしてくり返し警告を発していた。他方、ド・マンはデリダとともに脱構築を標榜しながら、脱構築の応用を否定したわけではなかった。ド・マンにいわせれば、脱構築のような概念は、そのものとして打ち出した途端、否応なくひとつの技術として翻案され、転用され、応用されて拡散せざるをえないのであり、そうした拡がり自体を否定することはできない。ド・マンはその概念がみるみるうちに伝播する状況を前にして、脱構築の技術的な翻訳可能性そのものを追究し洗練させたのだと言えよう。それは、脱構築の通俗化でもありうるが、民主化でもあり、結局のところ、脱構築の未来そのものなのである。

このような意味で「ド・マンは脱構築の概念を明示的に適用するところではデリダと違って、むしろデリダという名にまったく言及しないところでこそデリダに近い」と述べたロドルフ・ガシェの言葉はこのうえなく適切であろう（『読むことのワイルド・カード』吉国浩哉・清水一浩・落合一樹訳、月曜社、39頁）。かつてデリダ『メモワール』を読みながらそこに出てくるド・マン周辺の人々を調べてゆくうちに確信したのは、ド・マンの影響下には、ド・マンと同様ヨーロッパから大学に職を求めて渡米した卓越した学者が少なからず存在しているということである（いま引用したガシェがそうであるし、サミュエル・ウェーバーやヴェルナー・ハーマッハー、アンジェイ・ウォーミンスキーといった人々の名を挙げることができよう）。またド・マンたちが教えた学生のうちに日本では十分に知られていない優れた書き手が数多く活躍していた（とくにバーバラ・ジョンソン、ジョシエナ・フェルマン、シンシア・チェイス、キャシー・カルースといったド・マニエンヌたちの名を挙げておきたい。日本では水村美苗氏の名はすでによく知られるところだろう）。教育という点では、ド・マンはデリダにも勝るとも劣らぬ影響力を発揮していたのであり、これは、脱構築をめぐる二人の態度の差の帰結として理解することもできるだろう。

デリダ自身、みずからとド・マンとの差異に気づいていなかったわけではない。今回『メモワール』の翻訳作業から深く納得するようになったのは、デリダ自身がド・マンのいわば技術的思考に負っており、そこにハイデガーとの違いを刻印する「アメリカにおける脱構築」の可能性を見てとっていたということである。

『メモワール』の訳者あとがきに記したことと重なるが、ハイデガーは「技術は思考しない」と述べていた。しかし「技術は思考しない」という主張それ自体がド・マン的脱構築からみて依然として技術的である。思考そのものの技術化というものはないが、技術なくしては思考は存在しない。そのときまず思考しなくてはならないのは、つねにみずからを技術化する可能性なのである。思考は技術を拒否するのではなく、技術を知悉し技術を通して技術化しえないものへと突き抜けなくてはならない。『メモワール』ではデリダ自身そのことを、ド・マンの記憶の間にそくして展開していた。

ド・マンとデリダの共通点のひとつがこの記憶論のうちにある。一切の詳細を省いて結論を述べれば、ド・マンもデリダも逆説的なことに、まったく記憶すべき内容をもたない記憶、いかなる思い出も思い出さない記憶に着目している。それは、プラトンが重視した内面化する想起（アナムネーシス）とは異なり、悪しき記憶として糾弾された外面的な備忘（ヒュポムネーシス）のように、当人の意志を超えておのずと覚えていたことになる記憶のことである。

そのさいデリダがド・マンの記憶論のうちに着目していたのは「約束の記憶」であった。なんの約束か。それはかつて存在したことがなかったような過去の記憶、いわば、記憶喪失そのものを忘却したような過去の記憶との約束である。確認しようがない「歴史以前の」過去の記憶。だが実のところ、そのような記憶との約束として私たちは言葉というものを受け継ぎ、後世に伝えていくのではないだ

ろうか。

そもそも私たちから何か言葉のようなものが出てくることの核心には、かつてやみくもに暗記してなお忘れない歴史の年号のように、あるいは小学校の校歌の歌詞のように、心に刻みつけられて暗記した (learn by heart) ものが不意に口をついて出てくるものではないのか。こうした誰と約束したわけでもないのにあらかじめ残り続けている制御不可能な言葉の約束、そのような約束の記憶として私たちは言葉を用いていたのではないだろうか。そうしたもののうちに、ド・マンは絶対的な過去であるような芸術の根源 (「ヘーゲル『美学』における記号と象徴」)、デリダは詩の本質を見てとっていた (「詩とはなにか」)。

最後に、『メモワール』の訳書を出版しえた経緯をひとつの「約束の記憶」として付記しておきたい。はじめに記したように、本書『メモワール』の翻訳を一刻も早く出したいと考えていた私は、約十年前に共訳者の吉松さんに声をかけてこの企画を開始した。それから数年、さまざまな個人的な事情が重なって翻訳は難航していたため、2017年にもうひとりの共訳者である小原拓磨さんに協力を依頼し、2019年ごろには第I部の訳文の草稿はそろっていた。しかし新たな問題が持ち上がる。当時当てにしていた別の出版社ではすぐに著作権を取得することはできないことがわかり (かつてのド・マン事件の騒動のために慎重にならざるをえない状況があった)、一から企画書をつくり直さなければならなかった。ちょうどそのころ突如、水声社編集者の神社美江さんより一通のメールが舞い込んだ。判明したのはそもそも著作権は水声社にあるということであり、そのうえで翻訳できないかという申し出であった。まさに僥倖である。それからはとんとん拍子に話が進んでゆき、ついに今回の出版にいたったのであった。

いま思えばあのタイミングで本書の翻訳依頼が来たことは驚くべき偶然である。私自身は別の出版社で話を進めており、場合によってはこじれる可能性もあったが、あのタイミングで著作権取得がすでに終わっていたのもまったくの偶然である。私にとっては本書は、修業時代の思い出深い書物であり、なんとしても翻訳を実現させたかった。刊行したいまとなっては、そうしたすべての経緯は、かつて本書と交わした約束の記憶に導かれて、その約束を果たすこととなった運命の必然であると感じている。

執筆者について――

宮崎裕助 (みやざきゆうすけ) 1974年生まれ。現在、専修大学文学部教授。専攻＝哲学・現代思想。小社刊行の主な著書には、『[21世紀のソシユール](#)』(共著, 2018年)、主な訳書には、ジャック・デリダ『メモワール――ポール・ド・マンのために』(共訳, 2023年)がある。